

福井県医師会

だより

第618号 平成24年(2012)12月



夕焼け 福井市 平野 治和

表紙写真説明：夕焼け

福井市 平野 治和

「夕焼けの写真撮る人は多いのですが、夕焼けそのものを描く人は案外少ないようです。具象を描かない私ですので、物理現象としてはあり得ない抽象的夕焼けになりました。」

醫 縫 録

福井大学医学部附属病院の 現況と将来に向けて



福井大学医学部附属病院長 和田 有 司

旧福井医科大学に赴任し、はや13年が過ぎましたが、このたび4月1日付けで山口明夫教授の後任として福井大学医学部附属病院長を拝命しました。本院は昭和58年10月に開院しましたので、来年には開院30年という大きな節目を迎え、また病院再整備が歩み始めたなかで、与えられた職責の重さを日々感じております。

院長を拝命し考えました大学病院の課題、今後の方向性として、その主な項目のみ列挙しますと「既存プロジェクトの継続とそれを支える経営基盤」、「地域連携の強化」、「価値観の多様性の重視」、「ローカルとグローバルの融合」などですが、すでに広報誌などを通じて抱負という形でお伝えしましたので、ここではその一端を申し述べます。

まず平成16年の大学法人化以降、独立採算に耐えうる経営基盤の確立が一層求められていることを痛感しました。医療の複雑化、高度化、迅速化が加速する今日、医療の質を高めることが重要であり、それを支える経営の健全化が不可欠な要素であります。その一方で、給与削減など大学病院への逆風は強く、特に後述の病院再整備が進行するなか、長期的展望にたった多様な対応・戦略をたてる必要に迫られています。これには、自己完結的側面と協調共存的側面がありますが、後者に関しましては、地域との連携をさらに推進しなければと考えています。各医療機関の役割分担を病病連携、病診連携として強化することが、地域医療の底上げにつながり、さらには将来を担う医療人の育成に進展していくものと思います。これまで幸い本院は比較的順調に経営が推移しており、医師会の皆様をはじめ多くの方々のご支援に感謝するとともに、引き続き医療連携へのご支援もお願いする次第です。

申すまでもなく、本院にあたえられた大きな使命のひとつに、地域の医療を支える医療人の育成があります。平成16年から卒後臨床研修医制度が必修化されたことより、当初は地方での研修医が激減し、強い危機感を感じていましたが、最近では本院で学ぶ研修医は制度実施前の状態に回復しており、県内多数の病院と会員の

方々からの温かいご支援に御礼申し上げます。しかしながら、本院を含めた県内の医師不足は依然として解消されておらず、これと連動して診療への負担が益々増加することによって、研究へのマインドの低下を招くという悪循環に陥っています。他のアジア諸国の躍進と比較すると、事態はさらに深刻で、国レベルの対応が迫られています。その一方で、地球規模で情報が拡散し、共有化が加速している現在、若手医師との触れ合いを通して感じますのは、日々の診療で経験し実践した成果を地域をこえて発信したいとの思いが強くなっているということです。地域性と国際化は対峙するものでなく、地域に密着した医療を強化しつつ、地域で得られた成果を基盤にグローバル化へとつなげ開花させる方策を病院としても常に模索していきたいと考えています。

現況を語る時、明るい話題がありません。医療情勢ですが、本年3月より念願の病院再整備事業がスタートしました。まず第1期事業としての新病棟ですが、基礎工事も順調に進み、26年春には完成予定です。新病棟では、臓器・疾患機能別の病棟センター化を中軸とし、最先端医療装置の設置の他、個室の大幅な増加などのアメニティーの向上、災害時のトリアージ可能な仕様を取り入れること等々により、快適で安全な医療空間が提供できるものと期待しています。その後の、既存棟、中央診療棟、外来の改修を含めると、全ての再整備事業の完成は平成30年の予定で、これにより「優れた地域医療人を輩出するハイクオリティー・メディカルセンター」という再整備の理念が具現化することになります。

今後は医師会活動へのより積極的な参画を含めて、県内医療機関、医師会員の先生方との相互協力をさらに強化することで、県の医療の発展に向けて、少しでも多くの貢献をしていきたいと考えております。福井大学医学部附属病院への一層のご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。